

第14回 設楽ダム環境検討委員会 議事概要

日 時:令和8年3月11日(水)14:00~16:00

場 所:タイムオフィス 名古屋 Time DE(4F)

出席委員:松尾 直規 委員(委員長)、加藤 晃樹 委員、西條 好迪 委員、田中 正明 委員、
長谷川 道明 委員、森 誠一委員、(Web)前田 喜四雄委員

○議事概要

(1)設楽ダム建設事業について

- ・ ダム本体工事や道路建設工事などの実施状況(令和8年2月下旬時点)を報告した。

(2)環境検討委員会の経緯及び経過

- ・ 環境検討委員会等の経緯・経過、及び事業工程と併せた今後の委員会の予定等を報告した。
- ・ 湿地環境を持続的な維持と湿地管理の利活用方法を検討するため「設楽ダム湿地整備・管理運営検討会」を2月に設置したことを報告した。
- ・ 工事の主な区切りであるダム本体のコンクリート打設着手時として、令和8年度に第3回の事後調査報告を行う予定であることを報告した。

(3)環境保全措置等の進捗・実施状況

- ・ 工事中の土砂による水の濁りを抑制するため、沈砂池等を設置していることを報告した。
- ・ 職員による河川巡視や河川愛護モニターによる濁りの監視を行い、異常は確認されなかったことを報告した。
- ・ ダム下流河川における水質の監視として、ダム上下流において水質の定期調査や機器の連続観測による監視を行い、環境基準値内であることを報告した。
- ・ 工事による濁りの発生が見られたが、濁水対策の強化、監視を続け、濁りの発生頻度が少なくなるように努めていくことを報告した。
- ・ 降雨時の水質調査では工事上流部と下流部の粒度分布に大きな違いは見られなかったことを報告した。
- ・ 工事により発生する粉塵等については、工事現場内の散水や現場付近の道路清掃、工事用車両の泥落としマットの設置を行っていることを報告した。
- ・ 騒音振動については、低騒音型建設機械を採用し、工事による騒音や振動の抑制に努めていることを報告した。
- ・ 樹木伐採により発生した枝葉や根株等はチップ化し木質バイオマスとして有効活用を行うことで、廃棄物発生抑制や、エネルギー源としての再利用を進めていること

を報告した。

- ・ アケボノユウレイグモの移植後の監視を行い、個体数の維持や繁殖・世代交代が確認され、生息環境が維持されていることから、移植後 3 年監視した箇所については監視を終了することを報告した。
- ・ 植物8種について移植後の監視を行い、移植した個体の生育確認か、または新芽などの再生産の確認、さらに生育環境が維持されていることを確認したことから、移植後 3 年監視した箇所については監視を終了することを報告した。
- ・ シカ等の食害にあったとみられるマツバランの移植は、次年度監視結果を踏まえて移植箇所を選定することを報告した。
- ・ 移植実験中のチャイロカワモズクについては土砂堆積等を考慮し、移植箇所を再選定することを報告した。
- ・ 愛知県内の植物園等への域外保全種について、生育状況は概ね良好であることを報告した。
- ・ 工事箇所周辺で生育しているナツエビネについて監視を行い、生育状況・生育環境とも良好であるが、生育箇所付近で工事が継続されることから、引き続き監視することを報告した。
- ・ 豊川上流域の自然環境に配慮した工事の実施を目的とした会議を2回開催したことを報告した。
- ・ 2025年3月に公表された環境省レッドリスト(植物・菌類)、愛知県レッドリスト(動植物)を受け、設楽ダムにおける重要種の追加検討を実施した。
- ・ 環境保全措置の対象種として、マイコアカネ、ミヤマアカネ、ヘイケボタル、カワコザラガイの4種を追加し、これらは「湿地環境の整備」により保全できると考えていることを報告した。また、レッドリストから削除されたヤマアカガエル、ツチガエルについては重要種から除外することを報告した。
- ・ 動植物の保全措置を、直近の工事に対する対応、段階的な保全措置の実施、既往移植個体の監視の3つの方針で引き続き実施していく方針を提示し確認された。
- ・ 令和8(2026)年度は、直近の工事予定箇所周辺にムギラン及びナツエビネが生育しており、工事の進捗状況にあわせて移植や監視を行う方針であること、また生態系上位性のクマタカは、工事中の配慮等を継続して実施していくとともに、生息状況の監視を行っていく方針を提示し確認された。
- ・ 段階的な保全措置として、動物はネコギギの移植実験やカジカの段階的移植を実施していくこと。またオオクボシダ、ヤマシャクヤク、キバナハナネコノメ、マツバラ、ケサガリゴケ、チャイロカワモズクについて段階的に移植を実施していく方針を提示し確認された。
- ・ また移植後の監視として、動物はアケボノユウレイグモ、植物はキバナハナネコノメ、マツバラ、ミギワイクビゴケ、ケサガリゴケ、チャイロカワモズクの5種を対象に実施

していく方針を提示し確認された。

- ・ 新たに追加した4種について、現在も事業地周辺で定着しているのかを確認しておくのが良い。トンボ類の中でも、マイコアカネ、ミヤマアカネは飛翔力が高く、発生地は別にあって、他の地域で発生したものが移動して確認されることもある。整備した湿地はまだ環境の攪乱が行われて落ち着いている状況ではなく、湿地環境そのものが常に変化するような不安定な状況であるため、湿地環境と生息する動植物の状況については今後もモニタリングを続け、湿地の整備方法とともに、追加種については経過を見ながら検討するのがよいとのことをご意見を頂いた。
- ・ 湿地保全においては、地元活動などを継続することによって、どのように保全を活用していくのか、その考え方などが継承されていくことは、環境検討会の重要な案件であるとのことをご意見を頂いた。
- ・ 濁水処理施設などの環境低減措置の施設については機能しているかどうかの監視が引き続き必要である。また、濁水のほか、土砂の流出により、特に底生生物やネコギギなどが影響を受ける可能性が大きいいため、濁水の監視とともに、土砂流出の監視も注視してほしいとのことをご意見を頂いた。
- ・ 山村都市交流拠点では、地域づくりの一環として、ビオトープのような地元の方が利活用できるものを検討いただければとのことをご意見を頂いた。
- ・ 環境改善について、これまでの議論の内容や実績、委員会の進め方や仕組みがとりまとめられるとよいとのことをご意見を頂いた。
- ・ 全体に一つ一つの種を守ることに努力は非常によくできており、ダムの影響を最小限に抑えて種を守る努力は十分なされているとのことをご意見を頂いた、自然界では水生昆虫の種数や量が 20 年前に比べ減少している。それらを鑑みれば、今後、ダムの環境検討の中で、今以上の貴重な種自体の保全を要求することは非常に難しいのではないかとのご意見を頂いた。

(4)各検討会の報告

- ・ 各検討会での検討内容の概要を報告した。
〔魚類検討会〕
 - ・ 令和7(2025)年度は、主に環境改善淵を含めて移植淵の効果事例数を増やし、ネコギギが移植後も存続するための条件の検討を実施したこと
 - ・ 令和7(2025)年度における豊川流域のネコギギの推定個体数は減少傾向ではあるものの、2023 年の出水以降、推定個体数が回復し、安定的に当歳個体が出現する淵が見られていること、放流実験を行っている支川では放流由来の個体数の比率が高まっていること
 - ・ 環境改善については、野外実験結果より環境要因を抽出し、今後は「深みの創出」「巨石組み」を中心に整備すること
 - ・ 存続性の検討としては、区間内に複数安定した移植淵を創出していくこと

- ・ 地域保全としては、引き続き、地元高校理科部や小学校で周知・啓発を行っていること、豊川市で開催されたフォーラムにおいて、ネコギギに関する取り組み報告・周知を行い、ネコギギ保全に関する関係者の創出・拡大を図ったこと

〔猛禽類検討会〕

- ・ 令和7(2025)年繁殖シーズンは、監視対象のクマタカ3ペアのすべてについて、繁殖の成功が確認されなかったこと、そのうち1ペア(A ペア)では繁殖行動を確認したが、繁殖途中で失敗したこと、1ペア(B ペア)では繁殖を確認したが巣立ち前に雛が落鳥して途中で失敗したこと、1ペア(Cペア)では昨年生まれの幼鳥の養育を選択したこと
- ・ 個別の環境措置は実施していないが、モニタリング調査により影響の有無を確認しながら工事を実施したこと、監視調査を行った結果、3ペアすべてにおいて忌避・警戒行動は確認されなかったこと
- ・ 繁殖失敗及び繁殖活動未確認の要因について、断定はできないが、モニタリング及び林内踏査の結果等から、繁殖失敗した A ペアは、コアエリア内に侵入した他個体への警戒が繁殖行動に影響を及ぼした可能性があること、また採餌環境の質の低下も影響として推察されること、AペアとBペアについては高齢化しているため、今後個体が入れ替わるまで繁殖成功率が低下する可能性も考えられること
- ・ 令和8(2026)年繁殖シーズンの調査計画として、Aペアについては抱卵期までに営巣地の特定を行うこと、監視カメラ等を活用しつつ調査を実施すること、また、工事の間接的な影響についても確認・記録すること
- ・ 工事に伴う環境保全措置については、近傍で工事のある A ペアの工事による騒音の影響が限定的と推測することから、個別の環境保全措置は行わず、モニタリング調査での忌避・警戒行動を確認することとしたこと
- ・ 今年度はダム堤体施工として予定される骨材輸送路について、騒音影響予測を行ったこと、その予測結果として、騒音レベルが十分小さいため猛禽類への影響は小さいと考えていること

〔湿地整備・管理運営検討会〕

- ・ 今後湿地の利活用を踏まえた維持管理を検討するため、今年度より「設楽ダム湿地整備・管理運営検討会」を設立したこと
- ・ 湿地 A については、創出した池は維持されているが、取水源の土砂等堆積により一部乾燥化が進行していること、湿地の横に設楽町が公園整備予定であること
- ・ 保全対象 22 種のうち 10 種を確認し、生育状況・生育環境が良好と判断され、令和 6 年度でモニタリングを終了していること
- ・ 湿地 B については、湿地 A に比べると取水量が安定し、湿地環境が維持されているが、畦や流末の堰等の破損していること、付近に公園の整備予定と町の天然記念物のウバヒガンザクラがあり、ハイケボタルも確認されていること
- ・ 保全対象 22 種のうち 10 種を確認し、生育状況・生育環境が良好と判断され、

令和 6 年度でモニタリングを終了していること

- ・ 湿地の特性を踏まえ、湿地 A は「湿地だけでなく池や草地等で構成される里山環境」、湿地 B は「多様な動植物が生息・生育する広がりのある湿地」を目標像として提案していること
- ・ 今年度の利活用として湿地環境における環境学習会を地元高校と実施したこと、豊川市で開催されたフォーラムで取組内容の報告・周知を行い、その後、フォーラム参加者からの問い合わせや現地案内を実施したこと、環境系学生を対象とした現場案内や実習の場としての活用もあったこと
- ・ 今後の進め方としては、地域連携を踏まえた湿地管理検討を継続し、令和 10 年度を目標に地域と協働で実施できるような整備や管理についてのガイドライン作成を予定していること
- ・ 湿地の保全では、里山の森林施業にも目を向けて、湛水域周辺の山の二次林の管理、薪炭林の整備のような定期的伐採により周辺山林を育て上げることで、昔からの林業を継承できるとよいというご意見を頂いた。
- ・ 域外保全をしているアギナシは、かつては水田雑草であったが、早場米など米の収穫期が早くなり、アギナシが絶える方向で推移している。かつての植物を残して示すためにも、域内保全として、萱場や水田耕作地を残すなどの取組を検討できるとよいのご意見を頂いた。

(5) 事後調査報告書(案)

- ・ 事後調査報告は、ダム工事の主要な区切りで6回予定しており、今回はその第 3 回である。
- ・ 今回の事後調査報告は、事後調査を実施しているクマタカ、アケボノユウレイグモ及び植物の重要な種の5種を対象とする。
- ・ 事後調査報告書(案)として内容を提示し、了解が得られた。今後、愛知県条例に基づき公告・縦覧等の手続きを進めていく。

以 上